

【東京新聞賞】

名プロデビューサー

大島 史美

「お前が何と言おうと、俺は仕事を辞めるからな！」5年前の冬、定年退職を2年後に控えた父が突然母へ切り出した。公務員になって勤続40年、私たち一家4人を養ってきてくれた父。家でお酒を飲みながら仕事上の苦労話や世間話等をよく母に話しているのを聞いていたが、「辞める」という言葉を出したことは、娘である私の記憶には一度もなかった。

終戦直前に5人兄弟の3男として長崎で生まれた父は、長嶋茂雄さんに憧れ、幼少期から野球一筋の少年だったと聞いている。高校卒業後は、自衛隊へ事務官として入隊し、25歳で結婚、一男一女をもうけた。その後は転勤の度に九州内を転々とし、私たち子供が大きくなってからは、単身赴任をすることも多かった。若い頃私生活では多少の失敗もあったらしいが、仕事はいたって真面目で、言われていない所まで自分で見つけ出してやり遂げるような、痒いところに手が届くほど一生懸命に仕事に打ち込む人だった。一方で、とても社交的な面もあり、職場の友人やその家族を自宅へ招いては、自ら調理器具を握り、お好み焼きや焼きそば等の手料理を振舞うことも度々あった。私が就職して実家を離れ、母と2人暮らしとなった後も、相変わらず転勤族生活

は続き、休日にはよく夫婦でその地域の観光名所へ出かけていたらしい。

もともとアルコールに弱い体質なのに飲酒量が多く、ヘビースモーカーの父。にもかかわらず、これまで一度も健康診断で引っ掛かったことがなく、いたって元気に過ごしてこられたのが不思議なくらいだった。そんな父に異変が起きたのは、6年前初めて転勤で九州を離れた時だった。慣れない地域での生活に戸惑ったのか、医師からは「うつ病」と診断された。幸い短期間の休養で落ち着き、電話で話す声も以前の元気な様子と変わりなくなっていた。「軽く済んでよかったね。」と家族全員ほっと胸をなで下ろしていた。しかし、それから1年も経たないうちにこの「辞職発言」が唐突に飛び出したのだ。

若い頃から読書家で、特に仏教書を愛読してきた母は苦難や困難に強い人に思える。どんな事態が起きようと、けっして相手に責任転嫁することはない。「これも自分の人生勉強。『何かを学べ』ってことよ。」が口癖で、状況の打開に向けて沈黙考するタイプだ。父がうつ病になった時、すぐに適切な治療を受け、休養できたのも、母の冷静な状況判断があったからだ。母は今回の父の発言をどう受け止めたのだろうか。私が母の立場だったら、きつとうろたえたに違いない。子供2人が独立した後とはいえ、転勤族であったため終の棲家は未定で、父が辞職すればこの先はつきりしている収入源はわずかばかりの年金だけ。普通なら考えただけでも、憂鬱になってしまうだろう。しかし、母は、普段通りの声で一言「父さん仕事辞めるんだって。」とだけ、私たち子供に連絡してきた。

冷静に対応しようとする母とは正反対に、父の「辞職」という言葉に一番うるたえたのが、私だったのかもしれない。もともと気の強い性格の上に、反抗期がとて長かった私は一番親を悩ませた子供だったと思う。中学生の時は、親がちよつと話しかけてきただけで、「うるさいなあ。話しかけないで！ 私の部屋から出て行ってよー」とよく大声を上げていた気がする。特に大学浪人2年目が決まった頃などは、最悪の状態で、何も悪いことをしていない両親への八つ当たりはひどく、傷つける言葉を浴びせてばかりいた。結局、20歳で地元の大学に入学するまで反抗期は延々と続いた。今振り返ると、家庭内で時々小さないざこざはあったけれど、「家族」という土台の結びつきがしっかりしていたため、ただたんに駄々をこねて甘えていただけだったのだと思う。大学卒業後、親元を離れ東京で一人暮らしを始めてから親のありがたみをはじめ知ると同時に、自分のやってきた愚行を後悔するようになっていた。ちやうどひどいホームシックにもかかっていた私は、「父が辞職したら、両親が離婚して、家族がバラバラになってしまうのではないか。」と気が気ではなかった。

私が入るたえた理由はもう一つあった。実はその当時、私自身、仕事を辞めたばかりで、心身ともにどん底状態だったからだ。大学卒業後「心も身体も治せる医師を目指して頑張るから」と張り切って、親元を離れ、都内の民間病院小児科へ就職したものの、現実と理想のギャップに打ちのめされ、わずか3年足らずでリタイヤする羽目になったのだ。想像以上に多忙で、プライベートな時間は二の次三の次。年に2週間の夏休み以外、ほとんど24時間休める日はなかった。

また、一部の上司との人間関係にも悩み、毎日のように泣いていたことを思い出す。(いったい、いつまでこんな生活が続くのだろう？　こんなはずじゃなかったのに……。3年目に入った頃から毎晩のように、仕事で失敗して上司から責められる夢を見るようになり、取り繕った笑顔さえ徐々に出来なくなっていた。実際の現場でも、(また怒られる！　どうしよう。)"と焦ってばかりで、(先輩の指導を聴かなきゃ！)"と思えば思うほど、頭は真っ白になった。(なんであんな判断をしたのだろう。)"と後になって後悔するものの仕事上の空回りはどんどんひどくなる一方だった。後2ヶ月で自分がチーフに就任しなくてはならない時期が迫っていた。(もう限界。自分がチーフになったら、患者さんに迷惑をかけることになる。間違いが起こってからでは遅い。やめよう！)、同僚達へ迷惑をかけてしまうことになったけれど、その時の自分の答えはこれしか出せなかった。同僚、先輩、そして上司に後ろめたい気持ちでいっぱいだったが、重責という追っ手からただただ逃げたい一心で職場を去った。今から振り返ると、当時の私こそ、まさに「うつ状態」そのものだった。それでもすぐに実家へ逃げ帰ることなく、何とか東京で再就職を目指すことが出来たのは、両親や現在の夫が心の支えになってくれたことと、「お前が悪いんじゃない。ただこの病院のやり方に合わなかっただけだ。次はきつと大丈夫だから頑張れよ。」というお世話になった先輩からの温かい一言があったからだ。(よりによってこんな時に何でまた父さんまで「辞める」なんて！　父さんを説得しないといけない！)と慌てて実家に帰省すると、すでに兄も到着していた。

1歳年上の兄は大学卒業後、いったん印刷会社に就職したものの、わずか3年で退社した。幼少期に足大腿部の病気を患い、自らギプスをつけていた経験があったからなのか、義肢装具士になろうと一念発起し、専門学校へ進学し直したためだ。3年間みっちり勉強し、翌春から念願の福祉系の会社へ再就職することが決まっていた。兄は私とは正反対の、どちらかというマイペースで穏やかな性格の人だ。しかし、兄も兄で、父の「辞職発言」を、前年の「うつ病」がまたぶり返したのではないかと心配しての帰省だった。

「お前達何しに来たんや。どうせまた、母さんが余計なこと言ったんだろう！俺はもう上司に辞表を出してきたんだからなあ！仕事を辞めて兄貴の会社を手伝うんだ。お前達は独立したんだからもう関係ないだろう！」と誰の目から見ても父が感情的になっているのは明らかだった。眼光鋭く、家族を睨みつけ、父の全身からどうしようもない「怒り」がにじみ出ていた。その「怒り」の本当の矛先はもちろん職場での出来事に対する「怒り」なのだろう。しかし一方で私は、父の中に「寂寥感」ともいえるような表情がちらつと垣間見えたような気がした。その瞬間ハツとなった。

団塊世代の父は典型的な「俺についてこい」タイプで「面子」にこだわる人だ。ところが、今回に限らずこれまでも家族内で意見が分かれた際、ほとんどの場合は、「1対3」つまり「父対他3人」になっていた。父親としての「面子」が父の冷静な判断を邪魔する上に、この「1対3」の構図がその「面子」をさらに後押ししてしまうのだ。本当は沈黙考タイプの母に焼きもちを

焼いているだけかもしれない。(どうせ俺の意見には反対なんだろう！俺を馬鹿にするんだろう！)と、父の本音が聞こえたように思えた。父はずっと寂しかったのではないか？父から見れば、今回の私たち子供の帰省は「辞職」という自分の判断を責められることを意味したのだろう。だから身構えてあんな言い方をしたのかもしれない。(何で辞めるの？)(これからどうするの？)と、私の心の中には、父に聞きたいことが山ほどあったが、父の発言の裏に隠れている本心に耳を傾けようと、「聞き役」に徹することにした。たぶん、母が私たちに連絡してきた目的はまさにこれだったのだと思う。「父さんきつと言いたくても自分(母)には言えないだろうから、あんた達2人がじっくり話を聴いてあげてよ。」という母の狙いがわかった気がした。その晩は、職場での人間関係が引き金になったということ以外、詳細は分からずじまいだった。翌朝は少し落ち着いた印象だったが、それでも父の決意は変わらなかつた。結局それ以降、家族みんな「辞職」の話題に触れることなく時間だけが過ぎ、私は東京へ戻る日を迎えてしまった。

「心配して来てくれたのにすまんかったなあ。でも、もう父さん(辞めるって)決めたからさ。」私を駅へ送ってくれる車中で、ボソツと父がつぶやいた。いつもの穏やかな顔の父に戻っていた。「わかった。父さんがそう決めたのならもう何も言わないから。でも、残念だなあ。仕事続けるのって大変だよな。自分が今回失敗してよくわかった。父さんは40年ずつと頑張つて仕事続けてきたんだよな。私は3年で辞職して、春から再出発。兄ちゃんも一度就職したけど辞めて専門学校へ行き、今春から義肢装具士として再出発。2人ともまだまだ半人前でしょう。2年後、父さ

んが定年退職を迎えた時に兄ちゃんと2人で『お疲れ様でした。』ってきちんと挨拶したかったのに……。駅での別れ際、心なしか父の顔に少し笑顔が戻ったように見えた。東京に戻ったその晩、母から明るい声で電話がかかってきた。「父さんね、後2年仕事頑張るって言ってくれたの。あんた帰りの車で父さんと何話したのよ？」と。「さあ、何だったかなあ？ 私も春から再チャレンジしなきゃなあ。」と返事をしつつ、そのうれしい報告に、私の心もしっかり元気をもらっていた。きっと母はこうなることを願っていたのだろう。そして、娘の私に「相手の心を聞く鍵は『思いやり』である」ことを学んでほしかったのだと思う。

もともと小児科の中でも摂食障害等、思春期に起こりやすい問題に興味を持っていた私は、その後、縁あって再就職した総合病院で精神科、児童精神科を選択した。幸い、部下のバーンアウトが起きないよう心遣いをしてくれる病棟長や、何でも遠慮なく相談できる先輩、同僚に恵まれ、3年間笑顔で元気に過ごすごうが出来た。また、自分自身の苦い挫折経験や家族のうつ病体験など、しんどい時期を過ごしたからこそ、（ちよつとだけかもしれないが）患者さんの立場も考慮しながら、医療に従事することが出来たような気がする。昨年、長女を出産したため現在は医療現場を離れているが、いつかまたチャンスがあったら、児童精神科に戻りたいと考えている。その時は新たに「親の視点」を持って患児の心に寄り添うことが出来るよう、今は子供とゆっくり過ごす時間を大切にしたい。

父の「辞職発言」は私たち家族にとって大きな衝撃になった。しかし、相手を「責める」ので

はなく、「思いやる」ことの大切さを学ぶ貴重な機会になり、さらに、その苦しい経験をみんな
で協力して乗り越えられたことで、より家族の結束が強まったように感じる。また、あんなに両
親を困らせる思春期を送っておきながらも、今、冷静に過去を振り返れる自分になれたのも、多
分に母の影響が大きいのだろう。

我が家にとつて父が大黒柱なら、母は間違いなく「心地よい家庭」を見事に演出してくれた影
の「名プロデューサー」だ。けっして表に出ることなく、一歩下がって家族一人一人をよく見て
いてくれた。そして誰かが困った時、そつと寄り添ってくれたり、何らかの形で適切なアドバイ
スをくれたりした。「『心地よさ』を生み出す魔法は、家族への『感謝の心』」、「困難に出会った
時、冷静さを取り戻す秘訣は、『私心』を捨てて『無私』になること。」と、母の後ろ姿がずっと
教えてくれていたように思える。どれくらいかかるか見当もつかないが、私もこれから新しい家
庭で夫や子供が少しでも気持ちよく過ごせるような家庭を築いていきたいと願っている。

余談になるが、その後、我が家の父は無事定年退職を迎え、私たち兄妹はきちんと「長い間、
お疲れ様でした。」と挨拶することが出来た。現在、父は学校の用務員として働いている。母の
話では、祝日も学校の野球部の練習に駆り出され、長嶋さん張りとはまではとても及ばない
までも、大声を張り上げ、元気にノックを担当しているらしい。一方、母は母でバアバとして、
同居している2人の孫に大人気のようだ。毎日孫から追いかけられる大忙しの生活を楽しんでい
る。